様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 ２２ 日現在

機関番号：３２６３４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ０２６９８

研究課題名（和文）学習者と教師の双方の立場から探る英語文法指導

研究課題名（英文）EFL Grammar Teaching for Japanese Students and Teachers

研究代表者
上村　妙子（Taiho, Kamimura）

専修大学・文学部・教授

研究者番号：３０２０５９２６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究の目的は、今後の日本における文法学習・指導を開発するための基礎的な資料を提供することである。『中学校学習指導要領解説外国語編』(2008)と『高等学校学習指導要領外国語編英語編』(2010)に記載されている全ての文法項目に関して考案した文法テストと難易度判定アンケートを用いて、(1)大学１年生を対象に文法テストにおける正答率と難易度判定の関係を探り、(2)大学１年生と英語教師の難易度判定に見られる関係を学生の正答率を絡めて分析し、及び(3)大学１年生と高校１年生に『学校学習指導要領解説外国語編』(2008)』に記載されている文法項目に焦点を絞り日本人英語学習者の文法習得の過程を探った。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の意義は、中学校(2008)及び高等学校(2010)の英語指導要領に掲載されているすべての文法項目に関する文法テストと難易度判定アンケートを作成し、英語力の低下が問題視されている現在の日本の英語教育において、文法指導を新たな視点から再検討する重要性を明らかにした点にある。日本人英語学習者と英語教師の双方の視点から、学習者がさまざまな文法項目の中のどの項目になぜ躓くのか、教師はそのような学習者の実態をどの程度正確に認識できているのか、また学習者の文法能力はどのような発達過程を経るのかを示した上で、教師は今後どの項目に比重を置き、どのように指導すると効果的であるのかを明らかにしている。

研究成果の概要（英文）：　The present study was conducted with an originally designed grammar test and questionnaire, both of which were comprehensive enough to cover all the grammatical items listed on The Course of Study for Junior High Schools, Foreign Languages (2008) and The Course of Study for High Schools, Foreign Languages, English (2010). With these research tools, the study attempted to answer three research questions: (1) how Japanese EFL university students' accuracy rates for different grammatical items would be related to their perceived difficulty levels for these items; (2) whether Japanese EFL students' and teachers' perceived difficulty levels would be similar to or different from each other, and (3) how Japanese EFL students' grammatical competence would develop while receiving EFL education at the secondary school level. Based on the results of analyses, the study offers several pedagogical implications for grammar instruction in Japanese EFL classrooms.

研究分野：英語ライティング研究

キーワード：英語教育　文法　学習指導要領　大学生　高校生　英語教師　正答率　難易度判定

１．研究開始当初の背景

日本の英語教育においては、近年従来の伝統的な文法訳読法（Grammar-Translation Method）に基づく英語指導法に批判が集まり、その反動として、話し言葉の流暢さを重視する Communicative Language Teaching （CLT）が指導の主流となった。しかし、CLT を偏重した指導においては、文法指導は軽視される傾向にあり、学習者は意味と形式のマッピングを適切に行うことができず、それが英語力の低下に結びつくという問題点が生じることが指摘されている（白畑・富田・村野井・若林、2009）。

Canale and Swain （1980）によれば、言語のコミュニケーション能力（communicative competence）は文法能力（grammatical competence）、談話能力（discourse competence）、社会言語学的能力（sociolinguistic competence）、方略的能力（strategic competence）に４つの能力から成り、文法能力はコミュニケーション能力の重要な構成要素の一つとなっている。さらに、日本人英語学習者は母語である日本語との「言語間距離」が遠い英語を「外国語」として学んでいる（白畑、2008）。このような学習環境においては、英語の文法を学習し文法能力を高めなければ英語を習得はできないと考えられている（大津、2012）。したがって、日本人学習者に対し効果的な文法指導を行うことは極めて重要な意義を持つと考えられる。

２．研究の目的

これまで行われてきた文法指導に関する研究を概観すると、（１）特定の文法項目に焦点を当てたものが多いこと、（２）それら特定の項目についての正答率は分析しているが、学習者の認識する難易度に注目したものは少ないこと、（３）教師側の視点が不足していること、及び（４）大学生と高校生を横断的に調査した研究が十分ではないことが課題として挙げられる。

そのため、本研究では、まず中学校と高等学校で学ぶすべての文法項目を網羅する包括的な文法テスト及び難易度判定アンケートを考案し、日本人英語学習者のための、（特にレメディアル教育における）効果的な英語の文法指導を開発するための基礎的な情報を提供することを目的した。具体的には、以下の３つの研究課題を設定した。

（１）中学校、高等学校で学ぶ文法項目に関する日本人英語学習者の正答率と難易度判定にはどのような関係があるのだろうか。
（２）中学校、高等学校で学ぶ文法項目に関し学習者と日本人英語教師が難易度判定をした場合、学習者の生徒率を絡めて分析すると、両者の判定の間にはどのような類似点と相違点が認められるだろうか。
（３）中学校で学ぶ文法項目に関する日本人高校生と大学生の正答率から、日本人英語学習者の文法能力にはどのような発達過程が認められるのだろうか。

上記３つの研究課題に答えるために以下に述べる３部構成の研究を実施した。

３．研究の方法

まず、特定の文法項目に特化するのではない包括的な文法テストの作成に取り組んだ。『中学校学習指導要領・外国語編』（2008）及び『高等学校学習指導要領・外国語編・英語編』（2010）に掲載されている計 110 にわたるすべての文法項目を扱った文法テストを作成した。同時にそれらの文法項目に関する難易度判定アンケートも作成した。以下に示したものは、比較級を扱った文法テストと難易度判定アンケートを組み合わせたものである。

健は由美よりも背が高いです。	very easy ⟷ very difficult
Ken (　　) Yumi.	1　2　3　4　5　6

この文法テストとアンケートを用いて、上記の３つの研究課題に応じるために３部から成る研究を行った。

（１）第１研究

第１研究では、日本人大学１年生を対象に先に述べた文法テストと難易度判定アンケート調査を実施し、文法テストにおける各文法項目の正答率とその項目に関する難易度との関係を探った。

（２）第２研究

第２研究では、日本人大学１年生と日本人英語教師に難易度判定調査を行い、両者の判定の間の類似点と相違点を学生の正答率との関係も考え、明らかにする試みを行った。大学生には解答する際に感じた難易度を、教師には自らの教える学習者が感じているであろう難易度を推定して回答してもらった。

（３）第３研究

第３研究においては、日本人大学１年生と日本人高校１年生と対象に、『中学校学習指導要領・外国語編』（2008）に記載されている文法項目に絞った文法テストを実施し、中学校、高校

にわたる期間における学習者の文法能力(grammatical competence)の発達過程を推定することを試みた。70%の正答率を習得の閾値として、各文法項目を分類した。

第１、第２、第３研究のすべてにおいて、量的分析を行うだけではなく、質的分析を行った。量的分析は全体の傾向を見るために行った。質的分析では誤答分析を行い、誤答の原因を探ることより、なぜ学習者は特定の文法項目の正答率が低く、なぜその項目に困難を感じているのかを明らかにしようと試みた。

４．研究成果

それぞれの研究結果は以下の通りである。

（１）第１研究（2015 年度）

大学１年生がやさしいと感じていた文法項目の多くは中学校で学ぶ「基礎的な項目」であり、難しいと認識していたものの多くは高校で学ぶ「発展的な項目」であった。しかし、基礎的な項目の中でも、過去進行形や過去形の受け身などは、学生は難易度の低い項目と判断していたが正答率は低かった。発展的な項目については、特に関係詞の非制限的用法は正答率も低く難易度も高かった。さらに　後置修飾など中学校で学ぶ前置詞句によって名詞を修飾する後置修飾が理解できていない学習者は、高校で学ぶ関係代名詞による後置修飾も理解できておらず、基礎的な文法項目と発展的項目が緊密な関係にあることが分かり、後者の理解は前者の理解が前提となっていることが判明した

（２）第２研究（2016 年度）

学習者（大学１年生）と教師のさまざまな文法項目に対する難易度判定にはいくつかの類似点と相違点が認められた。まず類似点については、１）学習者も教師も共に中学校で学ぶ基礎的な項目はやさしいとし、発展的項目を難しいと判定していた。また、２）両者はどちらも正答率の高い項目をやさしいと判断し、正答率の低い項目を難しいと判断していた。相違点としては、３）学習者は教師より難易度を低め、すなわちやさしめに判定しており、さらに４）学習者は自らの文法能力を過大評価している傾向があり、４）そのような傾向はいくつかの発展的項目(主語+動詞+if で始まる節)のみならず基礎的項目（主語+動詞+形容詞の補語による構文など）にもみられることが分かった。

（３）第３研究（2017 年度）

大学１年生と高校１年生に中学校で学ぶ 76 の文法項目に絞った文法テストを実施し正答率 70%を基準として、文法項目を３種類に分類した。すなわち、１）大学生も高校生も正答率 70%に達していた「初期習得項目」(early-acquired items)、２）大学生は 70%に達していたが高校生は達していなかった「中期習得項目」（mid-acquired items）、及び３）大学生も高校生もともに 70%に達していなかった「後期習得項目」（late-acquired items）の３種類である。その結果、初期習得項目には 32 項目が含まれ、それは主に文の種類（５文型）に関するものであった。中期習得項目には過去分詞、受け身など 28 項目が該当し、後期習得項目には主語+動詞+補語による構文、最上級、不定詞の形容詞的方法などが含まれていることが判明した。

（４）上記３つの研究から、以下のような教育的示唆が得られた。

１）教師は学習者の現在の文法能力を知り、学習者がどこに躓き、どこに困難を感じ、その原因は何かを把握する必要がある。

２）学習者にとって困難な文法項目は①高校で学ぶ発展的項目が多く、②そうした項目は教室内での指導では出現する回数が低いためインプットが乏しく、さらに③対応する日本語との乖離が大きい傾向にある。教師には、このような学習者の躓きの原因を十分理解することが求められる。

３）その上で、教師は特に注意を払い時間をかけるべき文法項目とそうでない文法項目を分けて、指導を考案する必要がある。前者に該当する項目には、十分なインプットを与え、英語と日本語で表現方法が著しく異なる項目については日英を比較することも有効であると思われる。

４）教師は自らの難易度判定と学生の判定における相違点を認識することが大切となる。学習者は自分の文法能力を過大評価する傾向があるため、みずからの文法能力を自覚するよう促すことも大切である。

５）中学校で学ぶ基礎的文法項目の習得が学習者のその後の文法能力の基盤となっている。そのため、基礎的な文法項目の定着を確実にすることが極めて重要である。

（５）これらの研究成果は *EFL Grammar for Japanese Students and Teachers* として著書としてまとめ、詳しく解説してある。

（５）今後の展望

本研究では、『中学校学習指導要領・外国語編』（2008）及び『高等学校学習指導要領・外国語編・英語編』（2010）に掲載されている文法項目を扱った文法テストと難易度判定アンケートを作成した。しかし、すでに新版である『中学校学習指導要領・外国語編』（2018）及び『高等

学校指導要領・外国語編・英語編』』（2019）が告示されている。したがって、これらの新版に合わせ、本研究で用いた文法テストと難易度判定アンケートを改訂し、新たな研究を行うことが望まれる。

本研究では、中学校と高等学校で学ぶ文法項目を網羅して分析を行った。それにより、中学校、高等学校、大学における英語教育の連携を図る上での基礎的な資料を提供できたと思われる。教育課程が変わるごとに、文法の学習は５文型など初歩的な内容を繰り返すことが多い。本研究の結果を踏まえ、学習者の正答率が低く難易度も高いと感じている項目を優先して指導することにより文法指導の効率化を図ることができる。さらに、小学校でも英語を教科として教えることとなった。今後は小学校をも加えた小中高大の英語教育における緊密な連携が求められることと思われる。

近年日本の国内外で、従来の Grammar-Translation Method への否定的な反動により、文法指導は軽視される傾向にある。しかし、コミュニケーション能力の重要な構成要素として文法能力は含まれている（Canale and Swain, 1980）。特に日常生活で英語に触れる機会が乏しく外国語として英語を学ぶ日本人学習者にとって文法指導は無くてはならない。本研究の結果を活かし、学生に文法学習の重要性を認識するよう促し、コミュニケーションの能力の向上に結びつく効果的な英語の文法指導が数多く考案されることが望まれる。

〔雑誌論文〕（計１件）

Kamimura, T. (2015). An investigation of the developmental process of Japanese EFL students' grammatical competence. *Senshu Journal of Foreign Language Education, 44*, 65-88. 2015. （査読あり）

〔学会発表〕（計４件）

①Kamimura, T. (2017). *Exploring developmental stages of EFL students' grammatical competence*. Paper presented at 26th International Symposium on English Teaching and Book Fair.

②Kamimura, T. (2016). *Students' and teachers' perceived difficulty levels of different grammatical items*. Paper presented 25th International Symposium on English Teaching and Book Fair.

③Kamimura, T., & Hashimoto, Y. (2015). *Difficulty levels of different grammatical items for university EFL students*. Paper presented at 24th International Symposium on English Teaching and Book Fair.

④橋本 裕、上村 妙子. 「日本人大学生の英語文法習熟度調査—学習指導要領に基づく文法テストを用いて—」. 関東甲信越英語教育学会第 39 回山梨研究大会、2015 年.

〔図書〕（計１件）

Kamimura, T. (2019). *EFL grammar for Japanese students and teachers*. Senshu University Press. （印刷中）（査読あり）

〔その他〕

『専修大学高校教員対象研修プログラム』での講演・ワークショップ

①上村 妙子.「どの文法項目がむずかしいのか—学生と教師による難易度判定」. 2017 年度専修大学高校教員対象研修プログラム、専修大学、2017 年 7 月.

②上村 妙子. 「様々な文法項目に対する正答率と難易度との関係について考える」. 2016 年度専修大学高校教員対象研修プログラム、専修大学. 2016 年 7 月.

③上村 妙子.「さまざまな文法項目の難易度について考える」. 2015 年度専修大学高校教員対象研修プログラム、専修大学. 2015 年 7 月.

６．研究組織

(1)研究分担者　なし

(2)研究協力者　なし

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。